

# すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2019.6  
210号

■特集／守る。育てる。三重の“宝”

●いま、グループネット／かみのほたるを守る会 ●みえを歩こう／桑名市市街地界隈



# 守る。育てる。三重の「宝」

私たちが日々の暮らしを営む三重県には、美しい海・山・川があり、人々が適度に利用することで共存してきました。そこには多種多様な生き物たちが生息していますが、中には近年、絶滅の危機に瀕<sup>ひん</sup>しているものもあります。一方、長い時間をかけて大切に育ててきた植物の中には、貴重な品種だと確認されるものもあります。

今回は、希少な自然や動植物を、地域の宝物として大切に守り、育て、さらには魅力づくりに役立てている人々をご紹介します。温かく迎えてくれた人々もまた、三重の「宝」でした！。

\*各グループが開催するイベント・祭りなどの開催日時・場所は、変更になる場合がありますので、必ず事前にご確認ください。

取材・文：中村真由美

撮影：梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

多様な生物が生息する水辺づくり

# 水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座

〔亀山市二帯〕



外来魚駆除作業の途中、大きなフナを見つけて大喜びの参加者

「コバエ・コバヨ・コビンチョ・チンチンコーバイ・メンパ・メバヨ」。  
右に記した単語は、すべてメダカと呼び名です。同じメダカでも、多彩な呼称があるのに驚きます。  
メダカに限らず、同じ亀山市内でも、

地域によって魚の呼び名が異なることに気付いたのは、「水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座」の栗原勉さん、桜井好基さん、服部耕作さん。魚好きということで意気投合し、平成14(2002)年に同会を結成したばかりの3人は、

状を知り、外来魚駆除を行うことも大きな活動の一つとなっています。そのきっかけとなったのは、同16(2004)年前後に行った亀山市内の池の池干しでした。外来魚のブラックバスやブルーギルは数えきれないほどいるのに、本来いるはずの日本固有の川魚は、ほとんど見当たらず、わずかに残されたのは、30センチメートル以上のフナやコイのみという状況だったのです。以来、昔ながらの多様な生物が棲む池に戻すための活動が始まります。1か月以上かけて少しずつ水を抜いた上で池に入

り、ぬかるむ足元に悪戦苦闘しながら行うのです。こうして膨大な時間と労力をかけて外来魚駆除をした池は、これまでに30か所を超えるといえます。  
同会の地道で息の長い活動は、平成28(2016)年には「生物多様性アクション大賞」で入賞するなど、高い評価を得ています。また、70代が中心の「亀山の自然環境を愛する会」(浅田 正雄代表)や、30代が中心の「魚と子ども」のネットワーク(新玉 拓也代表)と連携した活動が評価され、本年3月には同2団体とともに、日本自然保護協会による

「日本自然保護大賞2019」教育普及部門の大賞を受賞しました。  
なお、本年3月3日に実施された、市内の池での池干しも、「魚と子ども」のネットワークとともに実施。子どもたちも含めて全員が胴長に身を包んで作業しました。皆さんの想いは、次世代へ着実に受け継がれていくことでしょ  
う。

### お問い合わせ

「水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座」  
TEL090-47955-8541  
(栗原 勉さん)



「中ノ川における魚の昔の呼び名」(右奥)と「鈴鹿川における魚の昔の呼び名」(左手前)



カワバタモロコ※



外来魚駆除作業



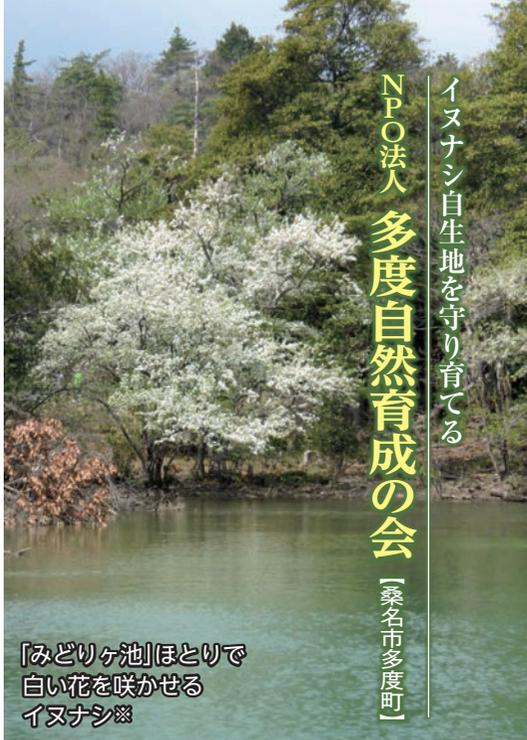
池干し作業に参加した皆さん

※印の写真は取材先から提供していただきました

イヌナシ自生地を守り育てる

# NPO法人 多度自然育成の会

〔桑名市多度町〕



「みどりヶ池」ほとりで  
白い花を咲かせる  
イヌナシ※

春には新緑、夏には川の流れをせき止めた天然プール、秋には紅葉と、季節ごとに賑わう多度峡のすぐ近くには、とても希少な植物の自生地があります。平成16(2004)年に三重県指定希少野生動植物種指定、同22(2010)年には国の天然記念物に指定された、イヌナシ(標準和名マメナシ)です。バラ科の落葉性の小高木で、国内では三重県・愛知県・岐阜県にのみ分布することから、NPO法人「多度自然育成の会」が中心となり、定期的な保全活動などが続け

られているのは、44株。数メートル以上に成長した木を間近に見ると、細くてしなやかな枝が無数に伸び、葉も蕾もとても小さなことに驚きます。大橋さんによれば、白く可憐な花が咲くのは4月上旬ごろで、秋には直径8ミリメートル程度の実が生るとのこと。ただし、実は渋くて、動物たちも食べないとのことでした。

また、落ちた実から発芽した場所を示す目印が立ててありますが、よく見ると、成長できずに消えたものが多い

られています。

ある日のこと、同会理事長の大橋 主郎さんの案内で山道を20分ほど歩くと、目の前に鏡のように静かな池が見えてきました。この「みどりヶ池」の対岸に広がるのが自生地です。現在、約3000平方メートルの湿地に生育

ありました。しかし、中には10年もの歳月をかけて50センチメートル程度に生育したものもあります。県内には四日市市などにも自生地がありますが、こうした自然状態での更新が行われるのは、多度だけなのです。



イヌナシ自生地保全作業※



大橋 主郎さん

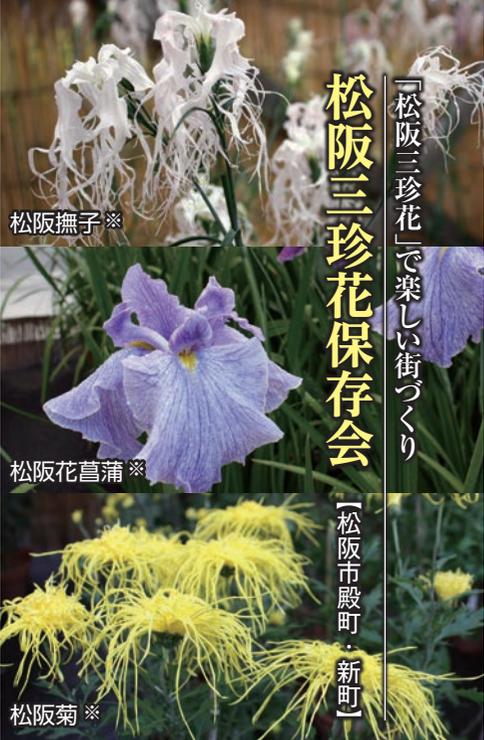
## お問い合わせ

NPO法人「多度自然育成の会」

TEL 090-9949-3038  
(大橋 主郎さん)

## 松阪三珍花保存会

「松阪三珍花」で楽しい街づくり



松阪撫子※

松阪花菖蒲※

松阪菊※

〔松阪市殿町・新町〕

良を重ねながら受け継がれてきた「三花」を、市内では「松阪三珍花」と呼びます。昭和46(1971)年には、松阪生まれの美しく貴重な花は、松阪で保存しなければという思いから「松阪三珍花保存会」が設立されました。

伊勢撫子・伊勢花菖蒲・伊勢菊。三重県天然記念物に指定されている3種類の花には、花弁が長く、縮れて垂れるという共通点があります。撫子と花菖蒲にはさらに共通点があり、江戸時代後期に松坂城下の同心町に住む紀州藩士の継松栄治が前者を、吉井定五郎が後者を育成改良したといわれます。そして菊は、同時代の新町に住む木下藤八が、嵯峨菊を基に育成改良したと伝わります。

育成の経緯などは異なるものの、各育成者が丹精込めて育て、その後も改

「楊枝で丁寧にはぐすといいですよ」。ある日、撫子の花弁のほぐし方を教えてくれるのは、同会4代目会長の北村守彦さん。撫子60鉢、花菖蒲30鉢、菊30鉢の世話は大変と話す表情は、とても誇らしげです。

こうして、約30名の会員たちが手塩にかけて育てた花は、5月中旬に撫子、6月中旬(本年は6月16日まで)に花菖蒲、11月中旬(本年は11月13日〜17日予定)に菊の各展示会



北村 守彦さん

で披露されます。場所は本町の「豪商パーク」で、県外からも見学者が訪れ、好評を得ています。また、松阪散策の折には「歩いて楽しい道づくり実行委員会(山川 良樹会長)が中心となって、各発祥地に建てた花碑をめぐるのもおすすめです。菊は新町に、撫子と花菖蒲は殿町(旧同心町)にあります。特に花菖蒲の発祥地には、築230年の吉井定五郎の屋敷が現存し、風情があります。松阪散策に新たな楽しみが加わりました。



松阪花菖蒲発祥の地に建つ花碑



吉井 定五郎の屋敷

## お問い合わせ

「松阪三珍花保存会」

TEL 0598-26-6812

※印の写真は取材先から提供していただきました

# 横輪町活性化委員会

【伊勢市横輪町】



「横輪桜」

昨年3月、伊勢市南部の山あいの里・横輪町に、朗報が届きました。「横輪桜」が公益財団法人「日本花の会」(東京都)から園芸品種の新品種に正式に認定されたのです。長い間、町民たちが待ち望んだものでした。

「横輪桜」は、江戸時代後期に町内の

粘りが強くて甘いと評判の「横輪いも」5月下旬から6月上旬にかけて乱舞するホタルなど、町内にはさまざまな資源・魅力がありました。その中でも、当初から活動の中心としていたのが、「横輪桜」です。4年後には住民全員が一丸となって「横輪町活性化委員会」を結成。花の苗木約2千本を町内各地に植樹したのです。こうして、町全体が花の名所となり、「桜まつり」期間中は、およそ3万人の訪問客が訪れるようになりました。



石垣も見事な桂林寺



「郷の恵・風輪」



向かって左から  
上田 修一さん、会長の上田 和夫さん、中西 克秀さん

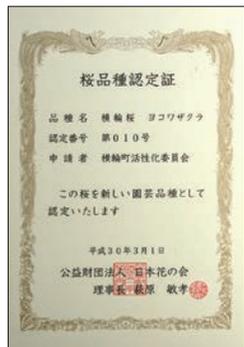


「桜まつり」

桂林寺に咲いていたサトザクラの一種といわれます。ソメイヨシノより数日遅く開花し、大きさも2倍から3倍も大きい花の最大の特徴は、成長するに従って花弁の枚数が変化すること。幼木のころの花弁は5枚ですが、やがておしべが花弁に進化し、中には12枚以

「蕾も大きいから、開花前から見ごたえ十分ですよ」「開花時期も長くて、例年3月下旬から4月中旬まで楽しめます。期間中に、何度も見に来る人もいます」「比較的低い位置にある枝にも花が咲くから、背の低い子どもや車椅子が利用していても、見上げることなく観賞できます」。二人の話を聞いていると、まるで自分の子どものように想っていることが伝わります。

「今後はハイキングコースを設定して、桜の季節以外でも訪問客を受け入



「桜品種認定証」

に珍しい「横輪桜」を、地域の人々は各々の家に持ち帰り、大切に育てたのです。

花の便りが待たれるころ、産直販売市民交流施設「郷の恵・風輪」を訪ねると、「横輪町活性化委員会」副会長の中西克秀さんと理事の上田修一さんが出迎えてくれました。同会の歴史は、住民有志による平成14(2002)年の検討会発足に始まります。過疎化・高齢化に危機感を持った有志たちは、通算78回の検討会を重ねながら、地域資源の掘り起こしに取り組んだのです。

「ここには、ダイヤモンドの原石がいっぱい落ちていっているのに気付きました」と中西さんが話すとおろり、冬場の強風から各家を守るために発達した石垣や、

れるようにしたいと考えています。また「郷の恵・風輪」の休憩スペースを拡張したいと考えております」と話す中西さん。そして「夏には、川遊びが楽しめるから家族でお越しください」と上田さん。横輪町には、まだ多くのダイヤモンドの原石が落ちていっているのです。

### お問い合わせ

「郷の恵・風輪」(月・木曜日休み)  
TEL 0596-339-1741  
TEL 090-3467-9120  
(中西 克秀さん)

上に増えるものがあす。美しい上

「やまとたちばな」の香り漂う街づくり

# 鳥羽商工会議所

【鳥羽市一帯】



3～4センチメートル程度の大きさの実を付けた「やまとたちばな」※

戦国最強の水軍大将と称された九鬼嘉隆、古代から平安時代にかけて天皇に食料を貢いだとされる「御食国」、平成29(2017)年に国の重要無形民俗文化財に指定された「鳥羽・志摩の海女漁の技術」…。

これらは、鳥羽市が誇る歴史・文化

遺産ですが、「やまとたちばな」もその一つです。タチバナは日本原産のミカン科の植物。答志島の桃取地区には、原木(県指定天然記念物)があることなどから、昭和44(1969)年に「やまとたちばな」として市の木に制定されました。

「香りをかいでみてください。どこか懐かしくありませんか」。

日差しが春めくころ、鳥羽商工会議所を訪ねると、専務理事の清水清嗣さんが「やまとたちばな」の果皮を使って作られた「匂い袋」を見せてくれました。袋からは、上品な柑橘系の香りが漂い、気持ち安らぎます。タチバナが日本人にとって特別なものだったことは、『古事記』や『日本書紀』に登場することからもわかります。『日本書紀』には、垂仁天皇の勅命により、田道間守が常世国から持ち帰った非時香果が、今でも「橘」のことだと記されているのです。非時香果とは、永遠に香っている果実という意味。その香りは、多くの和歌にも詠まれてきましたが、現代に生きる私たちにも、すばらしさが十分に伝わります。

鳥羽商工会議所では「匂い袋」のほかにも、数々の商品を開発。総務課課長の小林かおりさんを中心としたプロジェクト「百聞一食鳥羽の味」のメンバーだけで、気付くといえます。

鳥羽市が誇る「やまとたちばな」は、浦村町のパールロードや「鳥羽水族館」などでも見ることが出来ます。鳥羽を訪ねれば、いたるところで上品で懐かしい香りに出合えるかもしれません。

## お問い合わせ

鳥羽商工会議所  
TEL 0599-251-2751

バーがアイデアを出し合っており、お菓子や、調味料などを世に送り出しています。これらは、市内鳥羽1丁目にある「手づくり工房きらり」(TEL0599-251372)や相差町にある「海女の家五左屋」(TEL0599-3336770)で購入可能です。また、毎年12月には市内の旅館の女将たちでつくる「鳥羽あこや会」相差女将たちどり会「答志島たまも会」の皆さんが、同会議所で「お屠蘇づくり」を実施。屠蘇とは、橘皮をはじめとした各種の薬草を調合したもので、これを酒に浸して年の初めに飲

むと、災厄を避け福寿を招くとされています。この冬は鳥羽を旅して、女将たちの心尽くしの屠蘇を賞味してはいかがでしょう。

なお、「やまとたちばな」の花が咲くのは5月初旬ごろで、11月から12月には小さな実が生ります。市内各地では、約20年前から植栽が進められています。この日、同会議所の敷地内にある木には、まだ実が残っていました。清水さんのご好意で実を採り、皮をむくと、一気に爽やかな香りが広がります。「食べられますよ」と勧められて口に含



桃取地区での実の収穫作業 ※



向かって左から  
小林 かおりさん、清水 清嗣さん



「やまとたちばな」を使用して制作した商品



「お屠蘇づくり」をする  
女将さんたち ※

※印の写真は取材先から提供していただきました

世界中の人々がつながり、本当の里山を育てる

# NPO法人 赤目の里山を育てる会

〔名張市上三谷〕



「トンボ池」などが整備された「赤目の森」

「里山の本来の姿を見てください」  
水温むころ、名張市の上三谷地区に  
たたくむ「エコリゾート赤目の森」を訪  
ねると、NPO法人「赤目の里山を育て  
る会」理事長の伊井野雄二さんが出迎  
えてくれました。ここは、同会が里山  
保全活動や、障がい者の就労支援など  
を行う拠点となっています。

伊井野さんが案内してくれたのは、  
「赤目の森」と呼ばれる場所。古くから  
地域の人々が大切にしてきた里山でし  
たが、開発計画などが浮上したため、  
自然環境や歴史的環境の保存を目的と  
したナショナル・トラスト運動を行い、  
同会が平成9（1997）年に取得しま  
した。後に隣接する湿地も取得し、あ  
わせて30ヘクタールもの土地の保全活動  
が今も継続中なのです。

「最初のころは、3メートルものクマザ  
サが生い茂っていて、毎日草刈りばか  
りしていましたと懐かしそうに話す伊  
井野さん。以来、23年の歳月をかけて  
育て上げた「赤目の森」は、適度に木々



「エコリゾート赤目の森」外観



伐採された木から作られた炭



「トンボ池」での  
自然散策※ ハッチョウトンボ※



ブラジルやイタリアから訪れた若者たちが  
描いたイラストなど



薪割り作業に精を出すPAUさん



向かって左から松井 英美さん、菅 光輝さん、  
伊井野 雄二さん、PAUさん、伊井野 恵さん

が伐採<sup>ばさい</sup>されているため、陽の光が足元  
にまで降り注ぎ、開放感があります。こ  
こでは伐採した木を細かく砕き、圧縮  
して粒状にしたペレットをストーブな  
どの燃料に使用したり、炭などに加工  
して利用しているのです。

「里山の保全是、単に守るだけではだ  
めで、利用して再生するサイクルが必  
要です」と、伊井野さんが指し示す先に、  
伐採された木の切り株から新たな芽が  
出ているのが見えました。こうして萌<sup>も</sup>  
芽更新<sup>がこうしん</sup>した木が適度な太さに成長した  
ら、再び伐採して利用するというのが、

本来の姿だと教わります。

放課後にドングリ拾いなどをして遊ん  
だことを思い出しながら里道<sup>りどう</sup>を進むと、  
小さな池が現れました。休耕湿地を利  
用して整備されたビオトープ「トンボ池」  
です。この環境を求めて多くの野鳥や  
昆虫が集まってきましたが、中には、日本  
最小のトンボとして知られるハッチョウト  
ンボの姿も見かけると伺いました。

また、所々で外国語やイラストなど  
が目にとまりました。これらは「国際  
ワークキャンプ」で来訪した世界各国の  
若者たちが描いたといえます。「国際

ワークキャンプ」とは、世界中から集  
まった人々が、一定期間一緒に暮らして  
国際交流しながら、ボランティア活動  
をするというもの。その活動内容は、  
環境・文化保護、福祉、農村開発など  
と多岐<sup>たき</sup>にわたります。同会では、平成  
11（1999）年に受入れを開始し、こ  
れまでに2万人以上の若者たちが訪れ  
ました。木々の伐採をはじめとして、  
東屋<sup>あずまや</sup>に設置したベンチ制作、シイタケ  
の収穫・梱包<sup>くわう</sup>作業など、同会の活動を  
支えてくれたのです。

この日も、近くの山ではスペインか  
ら訪れたPAUさんが、職員たちと一  
緒に伐採した木の薪割<sup>まき</sup>り作業をしてい  
ました。これは「エコリゾート赤目の  
森」の燃料として利用するのです。

名張市の上三谷には、世界中の多く  
の若者たちと一緒に育てた、本当の里  
山の姿がありました。

## お問い合わせ

NPO法人「赤目の里山を育てる会」  
TEL 0595-64-0051

※印の写真は取材先から提供していただきました

# かみのほたるを守る会

鈴鹿市西庄内町上野地区を流れる八島川沿い一帯は、古くからホタルが自然発生し、季節になると、幻想的な光に包まれます。「かみのほたるを守る会」では、この景観と自然を守るために鈴鹿ほたるの里を整備し、来訪者に心安らぐ時間を過ごしてもらおうと、さまざまな活動をしています。



初代会長の大石 徹也さん

## お問い合わせ

「かみのほたるを守る会」  
 鈴鹿市西庄内町1498  
 (防災センター)  
 TEL 059-371-2254  
 TEL 090-4859-0113  
 (大石 徹也さん)

今回、お話を伺ったのは「かみのほたるを守る会」初代会長の大石 徹也さん。場所は、上野地区の防災センターです。災害時の炊き出し用の竈などが整備された同センターは、「鈴鹿ほたるの里」の拠点にもなっていて、飛び交うホタルの様子を一望できるウッドデッキが設置されていました。

——上野地区では昔からホタルが見られたそうですね。

大石：ここは、鈴鹿山脈の裾野で八島川の源流に位置していますから、美しい自然が残っています。毎年5月20日前後から6月中旬ごろにかけて、数千匹程度のゲンジボタルやヘイケボタル

が飛んでいるのはごく普通のことだったのですが、実は平成14(2002)年に大量発生したことがあり、山一面が輝いて、まるでイルミネーションのようだったのです。

——それは、想像するだけでワクワクします。多くの人が見学に来たのでしょうか。

大石：そうですね。ところが暗い中でホタルを追いかけられるため、川に転落するなどの事故が起きて、とても危険な状況でした。これではいけない、来てくれた人たちが安全に見学できるようにしよう、翌年に結成したのが「かみのほたるを守る会」です。見学者への対応としては、「鑑賞路」を整備して転

年寄りが心を込めて作っています。

——それは、すてきですね。ところで今年の「鑑賞期間」はいつですか？

大石：今年は5月25日(土)から6月30日(日)までを設定しています。ホタルはとても繊細な生き物ですから、雨風が強い日は避けた方がいいでしょう。満月などの月明かりも不向きです。時間は午後8時から10時ごろまでがおおすすめです。

——わかりました。期間中は少し早めの時間に来ると、「鑑賞路」沿いに植え

られたアジサイも楽しめそうですね。

大石：はい。ぜひ楽しんでください。実は、平成17(2005)年にサクラを植樹したのですが、ホタルの時期に見ごろを迎える花はないかと考えて、アジサイも植えたのです。今後は、アジサイ観賞やセンターの竈を使ってのご飯炊きの後でホタルを観賞するという体験ツアーも検討しています。

——ありがとうございました。お話のどかな風景が広がり、思いつきり深

呼吸したくなりました。これは、会の皆さんによる日々の保全活動の賜物といえるでしょう。「鈴鹿ほたるの里を訪ねれば、ホタルの光と地域の人々のおもてなしの笑顔に包まれることでしょう。

なお、観賞の際にはホタルを捕まえない、喫煙しない、フラッシュ撮影しないなどの注意事項を守るようにしましょう。また、運営資金への協力は100円となっています。

インタビュー…中村真由美



幻想的な光を放つホタル※



「鑑賞路」沿いに咲くアジサイ※



「防災センター」内に設置された竈



ウッドデッキからの眺め

※印の写真は取材先から提供していただきました



みえを歩こう  
 鑄物の街・桑名めぐり

# 桑名市 市街地界限

江戸時代を通じて、旧東海道の宿場町、桑名藩の城下町として賑わった桑名には、別の一面があります。初代藩主・本多忠勝が奨励したことには始まる「鑄物の街」としての顔です。鑄物産業の発展は明治時代以降も続き、地場産業としての確固たる地位を築きあげました。

現在、「七里の渡し跡」「六華苑」「九華公園」など、散策場所に事欠かない桑名市市街地ですが、今回は、少し視点を変えて「鑄物」めぐりをします。新たな桑名の魅力を発見するこゝとでしよう。

取材・文…中村真由美



住吉入り江に架かる玉重橋

## 玉重橋の親柱と高欄

「最初に、住吉入り江に向かいます。入り江に架かる玉重橋は、鑄物の街ならではの珍しい橋ですよ」との中根さんの案内で、散策の起点となるJR・近鉄「桑名」駅から、東へと進みます。15分程度歩くと、黒いランタンのような形の柱が見えてきました。これが玉



住吉入り江

## カラフルなマンホール蓋

玉重橋を後にして、入り江に沿って歩きます。歩道や護岸には赤レンガが張られ、隣接する「諸戸氏庭園」などの景観と見事に調和しています。

重橋の親柱(欄干の端など)にある太い柱で、ほかにも高欄や高欄支柱が鑄物だと教わります。鑄物とは、溶かした金属を鑄型に流し込んで固める鑄造方法と、その製品(鑄造製品)の総称です。使用する金属は、鉄青銅・鉛・アンチモン・アルミニウムなど。桑名では、古くから鉄を使った鉄鑄物が多く、親柱などの黒色は、鉄鑄物の特色なのです。



今回の案内人は「桑名歴史案内人の会」前会長の中根 静也(しずや)さん。豊富な知識に基づく軽妙な話術は、衰え知らずです。



「寺町通り商店街」



マンホール蓋

心地よい散歩を楽しんでいると、目の前に「寺町通り商店街」のアーケードが現れました。3と8の付く日に開催される朝市「三八市」や、毎月第3日曜日に開催の「十楽市」など、買い物客で賑わう商店街は、風雨を気にすることなく、鑄物製のマンホール蓋を見学することが可能なのです。足元に注目していると「桑名の千羽鶴」「七里の渡し」などの



親鸞聖人銅像

デザインの蓋を発見できました。

### 「次は少し時代を逆上った鋳物を見に行きましょう」との案内で、まず向かったのは、桑名別院・本統寺です。ここでは、見上げるほど大きな親鸞聖人銅像に出迎えられました。青銅製の上人像を昭和12(1937)年に鋳造寄進したのは、桑名の鋳物師・広瀬家の子孫で、実業家の広瀬精一氏です。鋳物師とは、鋳物職人のことで、同家の歴史は、本多忠勝が、現在のいなべ市から武器製造のために招いた広瀬与左衛門に始ま

るといわれます。その名声は高く、文政9(1826)年には、オランダ商館の医師であるシーボルトが、江戸に向かう途中で立ち寄って見学したと伝わります。広瀬家ゆかりの鋳物は、すぐ近くの仏眼院にもありました。万治2(1659)年に広瀬家次が鋳造した喚鐘(説法の開始を知らせるために打つ鐘)です。一般的な喚鐘より大きく、見ごたえがありました。なお、同院では、寛永15(1638)年に京都の鋳物師が製造した梵鐘も見逃せない鋳物の一つです。



喚鐘

### 「春日さん」の青銅鳥居

仏眼院に別れを告げて東へ進むと、すぐ左手側に、木々が生い茂る一画が現れました。ここは、桑名神社と中臣神社を祀る桑名宗社で、地域の人々には「春日さん」と呼び親しまれています。平成28(2016)年にユネスコ無形文化遺産に登録された「石取祭」で知られる同社でも、鋳物の街ならではの珍しいものに出合うことができました。柱の高さが約6.7メートルの青銅製の鳥居です。旧東海道に面して建つ鳥居は、時の



青銅鳥居

藩主・松平定重が、辻内善右衛門に命じて制作したもので、寛文7(1667)年のことでした。辻内家は、広瀬家と同様、桑名を代表する鋳物師でした。現在でも、見るものを圧倒する鳥居は、当時の俗語に「勢州桑名に過ぎたるものは、銅の鳥居」とうたわれました。その後、大雨や天災に何度も合いました。が、その都度代々の鋳物師・辻内家によって修復され、現在に至ります。

### 本多 忠勝像

「鋳物発展の基礎を築いた忠勝公にも合に行きましょう」との案内で、中橋を渡ります。目の前に広がる「九華公園」を眺めながら進むと、「柿安コミュニティーパーク」内に建つ銅像が姿を現しました。どっしりと座った姿は、徳川四天王と称された猛将ぶりを彷彿させています。作者は「中川梵鐘店」六代目 中川正知さんで、平成2(1990)年のことでした。

忠勝以降、代々の藩主に奨励された



本多 忠勝像

ことで発展を遂げた鋳物の歴史は、明治時代以降も続きます。「東の川口(埼玉県川口市)・西の桑名」と呼ばれたほどでした。その後、主に日用品を製造しましたが、戦後は、工業製品や建設材料が主力となりました。また近年では、「くわな鋳物」ブランドとして新商品開発が行われ、ごはん釜・蚊やり器・文具なども登場。鋳物の可能性の幅が広がっています。桑名で新発見をする散策は、再び、JR・近鉄「桑名」駅で終了ですが、途中

で「NTNシティホール(桑名市民会館)」に立ち寄り、「鋳造報国碑」を見るのもいいでしょう。これは、昭和17(1942)年に、当時の「三重鋳物工業組合」有志が建立したもので、大きな石碑には、これまでの功労者を顕彰すると同時に、さらなる発展を願う気持ちが込められているのでしよう。

問 桑名歴史案内人の会

TEL 0594-21-5416

「三重鋳物工業協同組合」

TEL 0594-23-1431



「鋳造報国碑」

# 三重 の シンボル

木曾岬町

三重県内の市町などが、それぞれの特徴を象徴する存在として選定している木・花を紹介します。



町の木  
サクラ



町の花  
スイセン

■ お問い合わせ ■

木曾岬町役場 総務政策課 TEL 0567-68-6100

\*市・町名の50音順に紹介しています。

\*シンボルを選定していない、もしくは鳥や魚などを選定している市町も一部あります。

**表紙写真** 「水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座」「魚と子どものネットワーク」の皆さん(亀山市)

百五銀行 丸之内本部棟内の「歴史資料館」で、「すばらしき"みえ"」のバックナンバーをご覧くださいませ。  
☎ 経営企画部広報ESG課 TEL 059-223-2326(要予約)